

砂と暮らし 砂に学ぶ ITP だより

⑧

僕たちが滞在しているチュニジア南部の年間降水量は1000~2000mm。日本の平均降水量約1700mmと比べ、降水量が極端に少ない地域です。乾燥地では土壌面からの蒸発が多く、塩分を洗い流してくれる雨も少ないため、土壌中に塩類がたまる現象(塩類集積)がおこります。塩類集積地では作物が育ちません。

節水灌漑の研究



チュニジアで実験中の節水灌漑。黒く見えるのはチューブから出て土にしみこんだ水。必要な場所に必要最低限の量の水を使うことで、水の使用量を減らし、塩類集積を回避する

それにもかかわらず、塩分を含んだ地下水しか利用できない状況がありま

す。乾燥地において「限られた水資源」という言葉は、水の量的な問題だけではなく質的な問題も含んでいます。持続可能な農業には、節水と塩類集積対策が欠かすことができず、節水灌漑は効果的な対策の一つです。

そこで僕は、異なる節水灌漑の方法や灌漑水量を用いて、その効率性や塩分の蓄積量を比較する研究を行います。日々、圃場の手入れと、実験に追われています。泥だらけ、ヘトヘトになりながらも、これだけ厳しい環境下で作物が育つ事に驚きと喜びを感じる毎日です。

(鳥取大学大学院農学研究科学生・
槇野良介) (水曜日に掲載)

ITP(若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム) 国際的に活躍できる若手研究者を育成することを目指し、日本学術振興会が支援する事業